授業外多読を実践する教師の期待と葛藤 —マレーシアの高等教育機関での実践を対象として—

A Teacher's Expectation and Challenge in Implementing Out-of-Class Extensive Reading:
A Case Study at a Malaysian Higher Education Institution

尾沼玄也^{*}・石松文枝^{**}

ONUMA Genya^{*}・ISHIMATSU Fumie^{**}

拓殖大学^{*}・マレーシア日本国際工科院^{**}

Takushoku University^{*}・Malaysia Japan International Institute of Technology^{**}

発表要旨

本発表では、マレーシア日本国際工科院（以下、MJIT）での授業外多読実践者である第二筆者（以下、I）の多読への期待や葛藤について分析する。

IIは2023年10月から2025年6月まで4学期にわたってMJITで授業外多読を実践した。活動は昼休みの時間を利用して週1回程度、学期中に継続して行われた。2025年7月に第一筆者がIIに半構造化インタビューを実施し、SCAT（大谷2008）の方法で分析した。得られた理論記述は以下のようなものである。

1. 活用できる多読材が十分な量確保されることが、教師の初めての多読実践を後押しする。
2. 外国語環境では、学生の日本語力の速成が叶わず、特定レベルの多読材が枯渇することが授業外多読の運営を困難にさせる。
3. 多読を実践する教師は、多読の学習効果は遅効的なものと捉え、効果を実感できない学生にも一定期間継続して活動に参加することを期待する。
4. 多読を実践する教師は、活動に参加する学生の意欲の向上に寄与することを自らの役割と捉え、内的・外的両面からの動機づけの工夫を凝らす。
5. 内容の理解を重視する多読を実践する教師は、「読みの正確性」を目指さず「楽しむための読み」の価値を再評価するなど、読むことに対するビリーフを変容させる。

多読を実践する教師の内省についての研究は少ない（池田2023）が、実践知を集積し、分析することで多読導入の敷居を下げ、実践をより安定的で価値のあるものにすることができるだろう。（579字）

引用文献

- 池田庸子（2023）「多読授業を実践する日本語教師の意識の変容—日本で教える教師の語り—」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』Vol.6, pp.11-22
- 大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案 —着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』Vol.54, No.2, pp.27-44